



A DREAM OF PASSION

# 女の叫び

昭和54年度芸術祭参加作品

芸術創造の饗宴すらも  
愛憎の刃で鋭く引き裂いた  
女だけの痛みと悲しみ！  
鬼才が問う詩と真実！

メリナ・メルクーリ  
エレン・バースティン  
アンドレアス・ヴァツィーナス

製作・監督・脚本  
**ジュールス・ダッシン**

エウリピデス・バティア現代語訳 ● ミノ・ヴォロナキス

撮影 ヨルゴス・アルヴァニティス

音楽 ヤニス・マルコプロス

カラー作品 / プレン・フィルム・メリナフィルム製作 / 東宝東和提供



TOWA

俳優は、さまざまな役柄を演じながら、さまざまな人生を体験する、といえるだろう。芝居である以上、そこには誇張もあり省略もなされるわけだが、少くとも、ある人格もしくはある人生の真実を伝えるべく、俳優は全情熱を燃焼させる。

その燃焼を、ジュールス・ダッシンは最新作「女の叫び」で鮮やかに活写してみせた。古典ギリシヤ最大の悲劇詩人の一人、エウリピデスの代表作「メディア」を素材に、メディアを演じるギリシヤ出身の女優マヤと、実際に子殺しの罪で服役中のアメリカ女性ブレンダとを対照させ、女の深奥を見きわめる。「メディア」は、愛する人イアソンを追って異国ギリシヤにやってきたコルキスの王女メディアがイアソンに裏切られ、復讐のため愛するわが子を手にかけてしまうという、女にとつての「原罪」をテーマにした悲劇である。そして、ブレンダもまた、メディア同様ギリシヤにあって夫に背かれ、異邦人であるがゆえの孤独と怒りの果てに、わが子を殺害したのだった。

マヤ（メリナ・メルクーリ）が子殺しの母親ブレンダ（エレン・パースティン）に会おうと思った最初の動機は宣伝のためだった。夫の裏切りに悲しい復讐をしたブレンダと、メディア女優マヤとの組み合わせほど恰好の話題づくりはない。だが、マヤのそんな自信も期待もブレンダに会った瞬間、微塵に崩壊した。あまりにも大きく深いブレンダの悲痛と憎悪を見たマヤにとって、演すべきメディアはもはや観念の産物ではなくなった。マヤはいつものまにかブレンダと関わり始めていた。三人の子の母ブレンダは夫の任地ギリシヤに来てから、言葉の障害に閉ざされ孤独の日々を送っていたとき、夫にギリシヤ人の愛人が。絶望の奈落につき落とされたブレンダは夫を憎みぬいた果てにわが子に復讐のための刃をつき立てたのだった。父の日だった。マヤはブレンダの苦悩をわが身におきかえていた。いまのマヤはもう女優ではなかった。

昭和54年度芸術祭参加作品

製作・監督・脚本ジュールス・ダッシン  
A DREAM OF PASSION

# 女の叫び

カラー作品/東宝東和提供  
ブレン・フィルム+メリナフィルム製作



メディアというキャラクターを触媒に、芸術的創造に燃えるマヤと、愛憎と苦悩に心を引き裂かれたブレンダの二人が、出会いから始まって最後には人格的に同一化してゆく化学作用こそまさに、戦慄すべき感応の瞬間だ。原題の「A DREAM OF PASSION」は、シェイクスピアの「ハムレット」の、王子ハムレットのセリフからとったもので、映画の冒頭にそのまゝ引用されているが、この部分の意味は、「……さきほどの役者はどうだ/たかが、つくり話/かりそめの情熱に動かされ……」（小田島雄志訳。謀殺された父王の復讐を誓ったハムレットが、巡業にきた旅芸人が役柄ひとつにも真剣に打ち込む姿に深い感慨を覚えて思わ



ずもらすモノローグの一部である。俳優は一時的にせよ、まさにその「かりそめの情熱」にかき立てられるのが宿命であるが、マヤにとつて、メディア（そしてブレンダ）の懊悩は「かりそめの情熱」などでは済まされない、自分自身の懊悩にはかならない。

ダッシンは数年前からこの構想をあたためていたというが、直接には、イタリアで見た子殺しの母親の裁判だった。彼女が子どものことでは悲嘆にくれていたが、殺害したことを少しも後悔していないように、奇異な印象を受けた、ともらしている。そしていま、ダッシンは、メディア、マヤ、ブレンダという三人の女の心と肉体を通して

最愛のものまでも刃にかけた女のエネルギー、愛のパラドックス、結婚の崩壊、俳優と演技等について、さまざまな問題をつきつける。

主演は、私生活でのダッシン夫人であり、ギリシヤ演劇界きつての国際女優メリナ・メルクーリ。政変によって民主化された故国ギリシヤに戻りたいまも、演劇のみならず、政治的にも活躍している。かつて演じたことのあるメディアを、別な角度からとらえて試みる彼女の中に、メディアとメリナという二人の女の、虚構と現実が二重写しになつて見える。もう一人は、「アリスの恋」のアカデミー賞スターで最近では「プロビデンス」に出演したエレン・パースティン。ダッシンは彼女を脳裡において脚本を完成させたといわれるだけに、みごと監督の期待に応える名演である。二大女優の鬼気迫る競演だけでもまさに一見に値する。

また、映画の中のセリフは作品の性格上、すべてギリシヤ語と英語の二カ国語で構成されているのもみのがせない。

撮影は「旅芸人の記録」のヨルゴス・アルヴァニティスが担当、秀抜なカメラ・ワークでドラマチックな緊張感をよりあげている。

製作・監督.....ジュールス・ダッシン  
脚本.....ジュールス・ダッシン  
エウリピデス「メディア」現代語訳  
撮影.....ミノス・ヴォロナキス  
音楽.....ヨルゴス・アルヴァニティス  
装置.....ヤニス・マルコプロス  
衣装.....ディオニシス・フォトプロス  
編集.....ゲオルゲ・クロツツ  
キャスト  
マヤ(メディア).....メリナ・メルクーリ  
ブレンダ.....エレン・パースティン  
コスタ.....アンドレアス・ヴツィーナス  
マリヤ.....デスポ・ディアマンティドウ  
ディミトリス(イアソン).....ディミトリス・パパミカエリス  
エドワード.....ヤニス・ヴォグリス

12月上旬より

エキブ・ド・シネマ5周年記念

80新春ロードショー

●地下鉄(都営三田線)神保町・下車1分 国電(中央線)水道橋駅またはお茶の水駅・下車7分 ●神保町交差点

岩波ホール (262) 5252

お得な特別鑑賞券1,000円

(当日は一般・学生とも1,300円)  
岩波ホールチケット・ガイド(ビル1階)のはか都内各プレイガイドにて好評発売中/  
団体のお申込み・お問合わせは東宝東和渉外係(562)0111へ

12月30日～1月2日は休館

| 平日(月～土)      | 12:30 | 3:30 | 6:30 |
|--------------|-------|------|------|
| 日・祝<br>12月～6 | 11:30 | 2:30 | 5:30 |

上映時間

■入れ替え制・自由定員制